

2023
特選
文部科学
大臣賞

第56回「おかねの作文」コンクール

お小遣いも寄付も税金も

東京都・白百合学園中学校 3年 松尾 凜奈

300円。これは、小学3年生の時に始めて今ももらい続けている私のお小遣いです。「自分のおやつを自分のお金で買ってみたい」という私の希望を聞いて両親が「3年生だから300円から始めてみよう」と始まったお小遣い制度ですが、遊びに行く時はその都度お小遣いをもらっているため特に不自由を感じなかったことから値上げ交渉することもなく15歳の今も何となく続いています。

たかが300円と思うかもしれませんが、5年以上がたった今それなりの金額がたまっています。今年は兄とお小遣いを出し合って父の日と母の日にそれぞれの好物の和菓子やケーキをプレゼントしました。父や母の喜ぶ顔を思い浮かべながらプレゼントを買うのはとても楽しいひと時でした。そして、プレゼントして「ありがとう」と笑顔で言われた時の嬉しさは、自分の好きなものを買うためにお金を使った時をはるかにこえる満足感や充実感を伴うものでした。

私たちの社会には、寄付や税金など自分のお金の一部を誰かに託して使ってもらう制度があります。一人一人の使うお金は多くはないのですが、大勢の人から集めることで一人では成し遂げられないことが可能になります。私は震災支援や保護犬への寄付をしたことがあります。困っている人や犬のために自分が役に立つことが嬉しいと思いました。募金を呼び掛けている方が持つ箱に寄付金をいれると、「ご協力どうもありがとうございます」とお礼を言われ、自分が社会のために貢献できたことを実感し、誇らしかったです。寄付をすることは自分のお小遣いが減るということですが、そんなことは意識もせずお小遣い帳に気持ちよく記入したのを覚えています。

私はまだ税金を払ったことはありませんが、ニュース報道などから税金を払っている人は寄付をした私のように気持ちよくお金を託していないのではないかなと思うことがよくあります。どこかの市区町村が建てた立派な建物や記念碑、道路などについて、本当にここに財源を使うべきだったのかという住民たちの

否定的な意見をニュースで報道していました。税金は寄付のようにお金を払う人がその使い道を直接選べないから気持ちよく支払うことができないのではないのでしょうか。

私たちの社会にはたくさんの問題があります。環境汚染や地球温暖化、少子高齢化、格差社会、人種・性差別、児童労働、フードロスなど一人では手も足も出ない大きく深刻な問題ばかりです。こういう問題をみんなで力を合わせて解決するために私たちは寄付をしたり、税金を払っているつもりです。お金を払った相手、つまり国や団体などが、自分が必要だと考える問題の解決を図るために税金を使ってくれているならば、不満がないはずです。それには相手を信用すること、相手に信頼してもらうことが不可欠です。信じている相手だからこそ自分の大切なお金を託せるのです。そして、直接「ありがとう」の言葉が相手から届くことはないのですが、自分が誰かや何かの役に立てているのだと実感できて寄付をした満足感や納税した充実感を味わえることにつながると思います。

お金を使う、お金を託すという日々何気なく行われている行動の根底にあるのは、自分と相手との信頼関係だと気づきました。300円というわずかな私のお小遣いも何兆円にもなる国民から集まる税金も、そのお金を託してくれた両親や国民の気持ちを大切に、託された私や国が誠実に用途を考える必要があるということは共通しています。自分と相手を信じて、正しいと思うことにお金を使う、必要だと思うことにお金を託し使い方を委ねる、ということを繰り返すことでこの社会はよりよく変わっていくのだと思います。

